

『愛よ～愛よ～第 3 弾』
—鶴亀鮎・阿部さんの震災から 5 年、10 年、15 年—

原 梨桜

はじめに（本講義を履修した経緯）

大学 2 年の夏休み、友達と東北を旅行した際に双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れた。さらにその冬に福島原発見学に行った。被害現場や写真、進行中の修復作業を目の当たりにする中で、それまで漠然と持っていた東日本大震災・原発事故・東北への興味が強い関心へ変わった。特に、被災住民と原発事業者の事情や立場の違いを聞くことで、お互いの気持ちや状況が共有されづらい現実に気づき、現地へ足を運び実際に生活を続ける方々から直接話を聞きたいと感じるようになった。

さらに法学部の授業で災害対策基本法と現場との齟齬を学び、ゼミなどで発災時の緊急人道支援を学ぶ中で公的機関の発災時の動きに強い関心を抱くようになった。

そのような時にこの授業を見つけ、この授業を通じて陸前高田市に足を運び、実際に住民の方に話を聞くことで自分の興味について何か深めることができるのではないかと考えて履修を決めた。

1. 本研究の問い

①「なぜ今、語ってくださるのか」

本レポートでは、インタビューの内容から鶴亀鮎の店主阿部さんが震災時にどんなご経験をされたのかを時系列順に整理するとともに、阿部さんの自伝『愛よ～愛よ～』における描写との違いなどにも着目しながら、阿部さんが震災から 15 年たった今、なぜご自身の被災にまつわる経験談を多く話して下さったのか、そして、その裏には阿部さんのどのような思いが隠れているのかを問うていく。

②問う理由

初めは別の方に、別のテーマでお話を伺う予定だった。しかし、急遽予定を変更して阿部さんにお話を伺うことになる。初めは当初と同じテーマで本レポートをまとめようと考えていたが、阿部さん独特の語り口や、冊子『愛よ～愛よ～』に収録されているエピソードと、インタビューで伺ったエピソードの内容に若干の相違点を見つけたこと、そして実習に同行して下さった筒井先生から「阿部さんがあんなに被災経験を語っているのを最近あまり見たことが無かった」とうかがったことから、上記の問を設定するに至った。また、何よりも、阿部さんのお話を整理する中で、この話を時系列順にまとめた『愛よ～愛よ～』第 3 弾を私が読みたいと思ったことが、本レポートの問を設定するに至った理由である。

2. インタビュー前に調べたこと

(1) 先行研究

①先行研究の題材

今回先行研究として使用したのは 2 冊の『愛よ～愛よ～』である。これは被災経験を中心とした阿部さんの自伝が載っている A5 サイズで刷られたオリジナル冊子だ。震災後にお店を再開してから、阿部さんはお店を訪れたお客さんに被災時の体験やその直後に起こった困難についてお話されることがある。この冊子は、そんな阿部さんの数々のエピソードの一部を、奇跡の一本松伐採の日に阿部さんと偶然出会った深谷雄一郎さんという方がそ

の日から一年後に再び鶴亀鮓を訪れた際に文字起こしして作成したものである。現在『愛よ～愛よ～頑張ってるねえ～』（以下『愛よ～愛よ～第1弾』と省略）と『愛よ～愛よ～第2弾一日でも長く店続けで、のれんを出し続けたい』（以下『愛よ～愛よ～第2弾』と省略）の2冊がある。今回インタビューで鶴亀鮓を訪れた際に2冊とも阿部さんからいただいた。

③ 先行研究への批判

まず、先行研究を通じて分からなかった点の一つは、阿部さんがなぜ「今」被災地のことをたくさん語ってくださったのか、である。前述したとおり筒井先生によると阿部さんは仮設店舗で営業されていた何年か前には発災当日のお話などをしてくださることもあったようだが、最近はこちらまで震災の話をしてくださることはなかったという。実は、研修3日目の夜に本格的なインタビューを依頼する前にも、我々が初日の夜ごはんを食べに鶴亀鮓を訪れた際に阿部さんはロサンゼルスに住む謎の人物ダニエル¹関連のひょうきんな話や、震災直後の過酷な状況、避難所となった中学校で炊き出しをしていた時に起こった事件など、「被災地」陸前高田でのご経験をたくさん話して下さっていた。この急な語り再開の理由は先行研究を読んだ時点では不明であった。

また、2冊の『愛よ～愛よ～』を読んだ際に、今回実施したインタビューの内容と比べて冊子では事実ベースのエピソードが多く、阿部さんの感情が直接的に書かれていることが少ないと感覚的に感じた。今回のインタビューでは当時阿部さんが抱いた感情も多く語ってくださった裏にはどのような背景があるのか、先行研究を読んだ時点では不明だった。

3. 調査の概要

① 誰（どのような人）に話を聞いたのか。

鶴亀鮓店主・阿部和明さん

陸前高田のランドマーク、アバッセたかたの左横に店舗を構える鶴亀鮓。その店主として、息子さんと一緒にお店を切り盛りされており、一度お店を訪れた人なら魅了される、とても明るい性格と、独特の語り口である高田弁の持ち主である。

② どのようにアプローチしたのか（インタビュー協力者との出会い、実施までの経緯など）

鶴亀鮓で、店主の阿部さんにインタビューをした。もともとは別の方にインタビューする予定だったが、連絡がつかなくなってしまったので、急遽、前日の夕飯にお邪魔していた阿部さんにインタビューを申し込むことになった。

前日の夕飯の時、阿部さんはご自分から大谷翔平やマイケルの話をしてくださった。初めは何の話か筋がつかめず困惑したが、その話は徐々に東日本大震災～鶴亀鮓再オープンの話に繋がっていった。ここでご自身の避難所での経験談やお店を再開する時に他の店主（東京から来た焼き鳥屋）との軋轢の話をうかがえたことで、私の設定していたテーマとも重なり合うような気がしてインタビューをオファーした。

③ インタビュー日時、場所、具体的な状況など。

調査年月日時：2025年8月20日19時～8月20日22時

場所：鶴亀鮓

¹ 阿部さんが大阪の鮓屋で修行をしていた時のお客さん。阿部さんの話によると、おそらく今はロサンゼルスで日焼けハローキティのグッズ販売を行っており、阿部さん宛てに大谷翔平グッズを送ってくれている。鶴亀鮓の一角には数々の大谷翔平グッズが展示してあり、阿部さんがダニエルとの関係性や大谷翔平グッズの紹介を行ってくださる。

4. 結果

阿部さんは、大阪のすし屋で修行をした後、1982年2月に陸前高田市で鶴亀鮎を開店した。そして2011年3月11日、東日本大震災が起こり、同年12月9日には「山の方」に土地を借りて1年4カ月の間仮設のような形で鶴亀鮎を再オープン。2013年3月からは、陸前高田未来商店街（以下、未来商店街と省略）にて鶴亀鮎を開店した。そして2018年8月24日、ついに現在も店を構える盛り土の地域で新装開店を果たした。

震災から間もない間に逆境の中でもお店を再オープンさせ、現在も盛り土の地で商売を続けていらっしゃる阿部さん。また、陸前高田なまりで次から次へと奇想天外なエピソードトークを聞かせてくださる阿部さんの気さくさを、お店に一度訪れた人なら絶対に忘れないだろう。そんな一見するととても明るく前向きな阿部さんだが、今回私たちが陸前高田を訪れた初日の夜ごはんのとき、そしてインタビューを急遽お願いすることになった3日目の夜には意外にも震災についてのお話をたくさんしてくださった。そして、その内容は新聞などに取り上げられている明るく前向きな復興論だけでは決してなく、むしろ阿部さんが当時感じていらっしゃったネガティブな感情や、震災の時期に感じた「必死に生きなければ」という思いがにじみ出るものだった。

▶発災当日

(1) おばあさんと逃げた話 (2011年3月11日)

2011年3月11日、震災当日阿部さんはお店にいた。店の近くに住んでいた寝たきりのおばあさんの避難を助ける担当になっていた阿部さんは、2回目の地震が起こった直後におばあさんの家へ向かう。当時96歳だったおばあさんを連れて、阿部さんは息子さんの運転する車に乗って3人でお店から避難をする。初めは市役所や高田小学校の校庭に避難しようとしていたが、息子さんに反対されて最終的には小学校裏の脇にある駐車場へと避難し、一命を取り留めた阿部さんたち。

阿部：そして96歳のおばあさんが（「と」の誤り）逃げた時に、もう助かったわけよ、俺たち、おかげさまで。

（・・・）そしたら息子が言ったの、一言。これで、あの、息子が、校庭に入られて言った時、入らないで親の言うこと聞かないで、我が家はその助かったと思う。

阿部さんは当時を振り返り、「おばあさんを避難させたおかげで」「息子が反対してくれたおかげで」と、誰かのおかげで生き延びられたことを強調しているようだった。

また、1番初めに作成された『愛よ～愛よ～第1弾』には、当時発災してからおばあさんを連れて避難所まで逃げた様子が事細かに約8ページにわたって記載されている。しかし、2019年に作成された『愛よ～愛よ～第2弾』では避難の様子は記されていない。そして今回のインタビュー、阿部さんから語られた避難の様子は上記に引用したトランスクリプトの部分のみで、『愛よ～愛よ～第1弾』に語られていたような事細かな様子は阿部さんの口から語られなかった。2冊の『愛よ～愛よ～』と今回のインタビューを比べたときに、「津波の時、うちではお客さんにどうやって逃げたのかって聞かれるんだでば」（阿部、2015）という避難のエピソードについては年々語る「量」が減ってきている。その代わりに、今回のインタビューでは被災時・直後、そして現在までに経験した阿部さんの苦悩や辛かったときのエピソードがより多く語られた。

(2) 娘さんを忘れていた話 (2011年3月11日)

避難時に息子さんとおばあさんと3人で避難した阿部さん。しかし当時、陸前高田には

阿部さんの娘さんやお孫さんも住んでいた。

*：おばあさん連れて逃げたのってちょっとだけ（『愛よ～愛よ～』で）読んだんですけど、（中略）その時に娘たち大丈夫かなっていう（心配する気持ち）のはやっぱりずっとあった？

阿部：そう。で、ね、ちょっと、そこ、そこ微妙なとこなんだけど。
（・・・）まだ言ってないとこなんだけど。

おばあさんを安全な場所へ送り届けようと市役所に向かった阿部さんだったが、市役所に集まる人の多さを見て「どうすっかな」と思っていたところ、車の外で「小学校だな」という声を聞き、おばあさんを小学校に避難させるため再び出発する。

阿部：けども（本当ならおばあさんより孫や娘のことを優先して）孫達のとこに行くはずなんだけども、（自分はおばあさんを安全に避難させるために）小学校に行ってるから。

（・・・）だから、なんか、なんかね、そこでね、一瞬忘れたんだこれ。

（・・・）一瞬忘れてばあさんをなんとかしようと思って。

（・・・）だから、いまだに、あの、娘には忘れたとは言えないんですよ。

避難中は娘さんとお孫さんのことを忘れていたという阿部さん。私は約 3 時間のインタビューの中で、このエピソードが一番心に残っている。このエピソードを語る時、阿部さんの目に涙が溜まっていたように見え、阿部さんの表情がとても悲しそうで、動揺していて、他のエピソードを語る時とは違うように感じたからだ。今までは様々なエピソードをスラスラお話して下さっていた阿部さんが、初めて言葉に詰まったような感じだった。

避難時の様子が書かれている『愛よ～愛よ～第 1 弾』を見ると、娘さんたちについての記載が出てくるのは冊子の 11 ページ。5 ページあたりから始まる避難の様子の後半に登場する。おばあさんを公民館に連れて行き「うちは娘と孫を探さないとなんねえがらもう行くがら」と公民館の人に伝えた一場面で初めて登場し、そこから約 1.5 ページにわたって娘さんたちを探しに体育館を回り、最終的に落ち合えたエピソードが記載されているが、娘さんのことを避難時に忘れていたという描写は一度も出てこない。

このエピソード自体については阿部さんが自主的に話して下さったものではなく、私から問いかけを行ったことで初めて引き出されたエピソードであると位置付けられる。

▶避難所

阿部さんは津波の被害に遭うことなく、なんとか無事に避難を終えた。避難先は第一中学校（現在の高田第一中学校）、通称「一中」だった。避難当初、体育館には電気もガスも水道もなかったという。阿部さんは発災後 3 日目から、一中に避難してきた人たちのための炊き出しを手伝うことになる。

（3）炊き出し開始（2011年3月14日）

阿部さんは炊き出しを始めた際のことについて、以下のように語って下さった。

阿部：俺がたまたま行ったところは第一中学校の体育館に行ったから、そこで、あの、「なんか手伝いますから」ということで行ったんですよ。そしたら「食べ物の方に行ってくれ」と言うから、本当は借金があって、（だけど）店が流されて、もう店を辞めようと思ってたんですよ。

発災直後の阿部さんは、それまでの借金を抱えていて、津波で店が流されてしまったこともあり、正直すし屋を辞めたいと思っていたそう。そのため、避難所に行って飲食業を営んでいるからと飲食に関わる炊き出し部門へ配属されたことに、実はあまり前向きではなかったという。

『愛よ～愛よ～第1弾』でこのエピソードは以下のように記載されている。

「あとは三日目になってからは、オラはどこも痛ぐもかゆぐもねえから、どっかなんか手伝いますからって言って、なんか係の人たちがいだから、行ったんだでば。そしたら、食べ物のごごさ行ってけろって言うんで、ホントのこと言うと、もう食べ物やるの嫌だなって思ってたんだけど、何でかんで、食べ物のごごさ行ってけろって言うんで『はいわかりました』って行ったんだ。」

今回のインタビューの語り口や話してくださった内容はこの第1弾に記載された内容に近かった。一方で、『愛よ～愛よ～第2弾』にこの話は掲載されておらず、阿部さんが炊き出しをすることに消極的だったという状況は全く読み取れない。

(4) おにぎりカビ事件 (2011年3月16日)

炊き出しを始めて数日も経たないうちに事件が起こった。阿部さんたちの避難していた一中に災害対策本部からおにぎりが届けられて配布された。しかし、そのおにぎりは白米におしんこを乗せた状態でラップを巻いて長時間放置された後に運ばれたものだったらしく、一部のおにぎりがカビていたのだ。炊き出し係の人たち自らが作ったわけではなく、誰も気が付かずにそのおにぎりを体育館に避難してきた人々に配っていたところ、ある看護師さんが阿部さんたち炊き出し係の人たちがいた調理場へ怒鳴りこんできたという。当時炊き出し係の中に男性は阿部さん一人だけで、しかも最年長者だった。現場で責任者が決まっていたわけではなかったが、その場にいた人の中で阿部さんが看護師さんに対して咄嗟に謝りに行き、その後すぐにカビの生えたおにぎりを回収したという。当時を振り返り、阿部さんはこう語る。

阿部：もう無理だった。その時は。(・・) だってその、まだね、3月だから、今さ、あれが夏だったらね、絶対みんな腹壊したと思う。

(・・) 全員が食ったわけじゃないんだけど、食った人いるんだから。だけでもそれが続いたんじゃ、これからも無理だと。これからそういうことをやっていけないと思ったので、俺はやめると言った。

阿部さんの弱音を耳にして、私は少し驚いた。これまで、嫌な気持ちを抱えながらも「前向きに、前向きに」と行動してきた阿部さんの数々のエピソードを聞いていたからだ。だからこそ、その瞬間は阿部さんの心が折れる音を聞いたような気がして、私自身も力が抜けてしまった。責任者が不在だったとはいえ、阿部さんは年長者として、飲食店の店主として、そして唯一の男性として、常に責任を背負いながら炊き出し係を務めていた。その重圧の中で、ふと頭を打たれたような衝撃を受けたのかもしれない。この日、阿部さんはただぼんやりと悩み続けていたという。

『愛よ～愛よ～第1弾』を見ると、この事件の概要は掲載されているが、インタビューで語ってくださったような阿部さんの心が折れた描写は記載されていない。また、『愛よ～愛よ～第2弾』にはこのエピソード自体が掲載されていない。

▶仕事探し

※これ以降のエピソードには『愛よ～愛よ～第1弾』が完成したと考えられる²2012年以前に起こった出来事もあるが、すべて『愛よ～愛よ～第1弾』に記載がない。

(5) 盛岡のすし屋で聞いた悪口 (3月)

周囲に励まされながら炊き出しの係を何とか続けていた阿部さんは、一方で岩手県盛岡市と陸前高田を往復し、仕事探しに奔走していた。お店が抱えていた借金を返済する必要があったからだ。盛岡では知り合いに働き口を紹介してもらったり、直接店を訪れて働かせてくれないかと交渉しようとしたという。盛岡にあるすし屋へ二度目の訪問を行った際（初回は勇気が出ず店主と話せなかった）、雇ってもらえないかと直談判しようとした阿部さんは、カウンター越しにお客さんと店の店主が交わす会話を耳にした。

阿部：使ってもらえませんかって言おうと思った時に、カウンターの人、たぶんその話してたんだっけな、それをこう聞いてて、まあいつ言うかな、いつ言うかなと思ってたら（・・・）この2人の会話が、被災、被災した奴らが国から金もらって遊んでるっていう話。急に言われて。これは大変だと。こんなような状態の時に、お願いしますっていう話じゃない、ということで、もうピタッとその話は止めて。だからもう、そういうことがこう次々いろんなことも出てくるんだよね。

お客さんが被災者を貶めるような発言をするのを聞き、阿部さんは「これは大変だ」と思ったという。この「大変だ」という気持ちには、驚きや、被災者のことをそんな風に煙たがっているのかという悲しみもあったのではないかと想像した。このエピソードの冒頭に阿部さんは「それこそ人前ではあんまり話にできない（「できる」の誤り：引用者注）話じゃないけど」と前置きしていた。このエピソードは『愛よ～愛よ～』には記載されていない。

(6) 家族優先 (3月下旬)

借金を返すために引き続き盛岡で職探しに没頭していた阿部さん。陸前高田と盛岡をバイクで往復する日々が続いていた。東京のボランティアさんから車を貰い、以前より盛岡との行き来が便利にできるようになった頃、知り合いから就職先を紹介され、すぐに電話をかけたという。

阿部：どこでもいいんだ。お金になれば、どこでもいいんだ！

阿部：住み込みであろうが何であろうがなんでも俺は仕事したい。ただし、俺はいっぱいお金欲しい。

阿部さんの言葉を聞いた店主は、「いつから来れんだ？」と電話口で返す。その時阿部さんは、陸前高田ではなく盛岡で新たに商売を始めようかと考え、すでに段取り

²『愛よ～愛よ～第1弾』には発行日の記載がないが、掲載内容から2012年に発行されたと推測される。

を始めていたため、まだ簡単に身動きが取れない状態だった。また、三人目のお孫さんが生まれる直前だったという。

阿部：・・・（思い出す阿部さん）・・・そんな、そんな、そんなこと言うて
るようなやつはダメだっというようなことを言われたの。だって孫のね、孫が
生まれそうだからって、そんな気ままな奴は駄目だ！って言うから、そんな時
すぐに、『申し訳ございません！すいませんでした！やめます！』って。

（・・・）そんな時にひらめいたのは、今助かった時に、孫の顔見れないって。

（・・・）そんな、そんなのはね（・・・）全然。（中略）そして、もう一つ、盛岡
にお願いしてた時にも電話かけて、やっぱり陸前高田で仕事しますから。そこ
にもかけた。（・・・）ビったりやめたの、両方。

阿部さんは学校で炊き出しをしていた時、家族を失っている周りの人たちが「せつ
かく生き延びたんだから」と言っ自分の人生を大切にしようと思心に決める光景を目
にした。そして、阿部さん自身も家族との時間を大切にしようと思直し、孫の誕生
を機にそれまで必死だった盛岡での職探しをきっぱり辞めたという。

阿部さんはインタビューの中でも「自分は家族がみんな助かったから」「周りの方
がもっと辛い人が多い」と口にすることが何度もあった。きっと、この時も少なから
ず家族を亡くした周りの人たちの状況と、家族が助かっている自分の状況を比べて、
そんな恵まれている自分が家族を無下にしてはいけないという思いがあったのだろ
う。

『愛よ～愛よ～第2弾』を見ると、このエピソードもしっかり記されていた。「せ
つかく助かった命だから、これからも孫とも顔を突き合わせて生きていきたい。孫
の顔が見れない、会えないような仕事はしたくない。『ここでなくてもいいわ』と急
に思ったんだ」と、インタビューで教えてくださったのと変わらない気持ちがここにも
しっかり記されていた。

▶山の方、未来商店街

その後、阿部さんは4月ごろには一中の炊き出し係を辞め、その後はいつか来る鶴亀鮎
再開に向けて店舗運営に必要な機械を購入するなど先行きが見えない中でも8月頃から
着々と準備を進めていた。その当時、陸前高田では被災した街の復旧・復興を目指し、い
くつかの場所で仮設商店街を作る動きがあった。阿部さんがお店を構えることになる「未
来商店街」もその一つで、一番遅くに始動した商店街でもあった。当時は11件の店舗の
店主が出店を決めていたという。

阿部さんはこの未来商店街への出店を決め、出店の話がまとまるまでの間は娘さん家族
が暮らしていた盛岡と陸前高田を往復する生活を始めることにする。阿部さんの記憶では
8月くらいに商工会の人から「プレハブが立つぞー！」という話があったという（ご本人
もあまり覚えていないとのこと）。また、この時期阿部さん宛てに全国各地からレターパ
ックに入った支援物資や励ましの手紙などが届いたという（『愛よ～愛よ～第2弾』13
頁）。盛岡から陸前高田に帰る際は、このレターパックを回収することも阿部さんの重要
な任務だった。

(7) 未来商店街始動に際した阿部さんの鶴の一声

未来商店街始動に向けて市の職員や出店希望者等と話し合いを重ねていた。しかし、店舗に使用するためのプレハブが県内外でひっぱりだこでなかなか手に入らない状態だったという。そんなある日、商工会の人から「2階建てのプレハブなら今なら建つぞ」という情報が共有され、阿部さん自身はこの2階建てプレハブを使って店舗再開を目指したいと考え得ていたが、他の事業者たちはどっちつかずな態度でなかなか話が進まなかったという。

阿部：そしてそれ（2階建てのプレハブが建つから使おうということ）を言ってるのにみんな誰もいうこと聞かないんだ。

会合のあったある日、阿部さんはあまりにも話が進まない未来商店街の構想に愛想をつかし、今日の会合を最後にこの未来商店街への出店も辞めようかと思いはじめていた。

阿部：それで、今日は会合の最後で、もうやめようと思って、行きました。そしてそこで、「みんなこうやって言ってるけどもいつまでも夢物語さ付き合ってるんや」と（言った）。「俺はもう別の場所でやるんだ」と。ただ、今プレハブを申し込めば2階建てが建つんだぞって。前から言っただけど聞かなかったんだけども、その時にまだ言っただらね、急に「じゃあそれに切り替えるか」ということになった。それで、じゃあそのやろうということがあって、未来商店街っていうのが建つことになった。あれがなかったら、これ本人達も言っただけからさ、だからそれがなかったら、プレハブだプレハブだって、いつまでたっても多分（未来商店街）できてない、と。バラバラなんなんだ。

話が進まない未来商店街の構想にしぶれを切らした阿部さんの言った「ただ、今プレハブを申し込めば2階建てが建つんだぞ」という一声をきっかけに、結局その会合にて2階建てのプレハブを建設する方向で出店の話が進みだしたという。他の事業主等もこの阿部さんの声が無ければ計画が進んでいなかったと証言してくれているようだが、インタビューを初めて阿部さんが陸前高田のことを批判したのはこのエピソードが初めてだった。口調からしても陸前高田の人たちを強く批判していたようには感じなかったが、当時の阿部さんがもどかしさを抱えていたことは読み取れた。

『愛よ～愛よ～第2弾』にはプレハブが手に入らない当時の状況についての記載はあったが、話し合いが全く進まなかった様子や、その出来事に対する阿部さんのもどかしさは記されていない。

(8) 土地の貸主に怒られる（詳細な時期不明）

ある日阿部さんに対して貸し家の話を持ちかけてくれた人がいた。一度その申し出を断った後、やはりその貸し家を貸して欲しいと申し出た阿部さん。結局その家を借りることはなかったが、店舗再開の際に報告挨拶をしないといけない、と思い一升瓶を持ってその

人の元を訪れたという。その際、阿部さんはその人にもものすごい剣幕で怒られた。

阿部：いやあ、申し訳ございませんって、頭下げて下げて下げて。そしたら今までにちょっとでも店で失敗したりなんかしたら、もう町ん中歩けなかった。今までは。昔は。ところがその人にすごい怒られたんだけど、全然何ともないの。

で、すごく俺がお世話になってるうちの常連さんに電話かけて、俺こんなに怒られたことないって。けども、全然、全然何ともないって言ったら、もう、あのな、と。『生きなきゃなんないと思ってるから、そんなことはどうにもいなくなったんだ。』と。いつもだったらもう誰かに怒られたらもうもう街歩けないと思ったのに、もう誰に何言われようが、もう何ともなかったの。というように、その、自分がそうになってたんだね。

「誰にも話したことないんだけど」と、このエピソードを切り出してくださった。それまでは少し怒られただけで店の外を歩けないと思っていた阿部さんだが、この時はきつく怒られても、今までと同じようには感じなかったという。常連さんからの言葉を受けて、震災当時は「生きなきゃ」とがむしゃらだったからこそ何とかやれていたことに気が付いた阿部さん。

私はこの話を聞いたとき、そしてその日の夜に一緒に実習へ行ったもう一人の受講生小倉くんと先生と私の3人で今日の振り返りをしたとき、「以前は店で怒られでもしたらもう街を歩けなかった」という阿部さんの発言が、普段の陽気な阿部さんからは想像できなくて驚いたという話をした。さらに、今回震災後のエピソードを話す阿部さんからは「生きてるんだから」「前向き」という、当時をがむしゃらに生きていたことを表す言葉がたくさん聞かれた。震災という出来事は、阿部さん一人の性格をとってもここまで変化させてしまうほどに大きな影響を持つ出来事だったのか、と改めて感じた。しかし、そのがむしゃらさが好転するエピソードもたくさん語ってくださった。

このエピソードは『愛よ～愛よ～第2弾』には登場しない。

(9) 看板を立てる話 (詳細な時期不明)

阿部さんは3月辺りに東京のボランティアの方から車を貰って以降、陸前高田で道行く人を次々と車に乗せていたという。当時を振り返り、「前を向くしかない震災当時の状況がそうさせた」と語っていた阿部さん。そんなある日、いつものように陸前高田の道歩いている人を車に乗せた際のエピソードである。

阿部：(中略) 多分その時は前しかやっぱり見えないから。だから、もう今までね、人前であんまりそんなに喋ったことなかったんだけど、その時に中学校に行ってる時に、ご飯作りしてた時に、(中略) 何もかも前向きなの。そして誰に会ってもみんなに声をかけて、そしてその辺に車が合った時にみんな乗せてあげる。そうするとね、みんな乗せられるとみんなに声をかけて不思議なことがいっぱい起きるんだって。

あそこの角に看板立てたいなとかって思えばね、そのたまたまこう「乗せて、乗せてくから乗せてくから」って歩いてるおばちゃん(に声をかけた)。そうしたら、「乗せて、乗せてくから乗せてくから」ってどこの誰だかわからないんだよ。(そのおばあちゃんに)「俺ね、あそこにね、看板立てたいんだけど誰だかわかんないんだけど」(と話したら、そのおばあちゃんが)「いいよ立てて。」

一同：ええ!! えええ(笑)

阿部：(車に乗せたおばあちゃんが)私の土地だって。だからそんな感じ。すごいさ。すーごいの。そんなことが何っ回もある。

(・・・)で、みんなに声かけて、みんなに声かけて。いい方にいい方にいっぱい回って。けども・読み方もできない、書き方もできない、計算もできないんだけど、誰もまだ店やってないうちに俺が先に行けちゃった、早くやったような気がする。

当時はとにかく前向きだったと語る阿部さん。震災の時はがむしゃらに頑張るしかなかったけれど、そのがむしゃらな頑張りが地元の人たちの支えもあって良い方に作用していたことがうかがえる。また、『愛よ～愛よ～第2弾』15頁の「手に職」では、自分が周りの店主よりも早く店舗を再オープンできたことに対して、「周りには優秀な人達がたくさんいるのに何でオレみたいなのが・・・」という阿部さんの周りに対する劣等感とも取れるような記述がある。ここに、阿部さんの周りに対する自信の無さが垣間見える一方で、実は陸前高田の人たちのおかげでなんとかやってこれたんだという、周りの人々への感謝の気持ちを強く感じることができると考えた。また、当時それだけがむしゃらに振舞わざるを得なかった状況を感じるエピソードでもあるのかもしれない。新聞記事などではいち早く鶴亀鮎を再オープンした阿部さんの前向きな側面ばかりに光が当てられることが多いが、その裏で阿部さんは苦悩を抱えつつもがむしゃらにやるしかない状況に身を置かざるを得なかったことが分かった。

『愛よ～愛よ～第2弾』では「偶然(?)の出会いもたくさん」という小見出しでこのエピソードが語られている。『愛よ～愛よ～第2弾』でも当時を振り返り、「そんな出会いがいっぱい、いっぱいあったんだ」と振り返っている。

当初阿部さんは9月に店舗再開を目指していたが、店舗に必要なプレハブが届かなかったので希望していた9月からの店舗再開をすることは叶わなかった。未来商店街の出店整備が整うまでの間、2011年12月～2012年まで、「山の方」で仮設店舗で営業を行っていた。

(10) 早期再建の申し訳なさ

前向きに生きているうちに人との縁や好機にも恵まれたという阿部さん。そんな好機も重なり、震災発生から約10か月が経った1月、未来商店街でお店再建の目処がたつ。商売をしていた人たちの中でも、発災から1年以内の営業再開というのは比較的早い時期に分類されるだろう。しかし、阿部さんはインタビューの中でご自身のことを読み書きもそろばんもできない、と謙遜するような、自分を下げて周りを上げていると取れるような発言を度々繰り返していた。

阿部：あの(・・・)読み書き算盤できない、ね。みーんなすごい優秀な人が周りにいっぱいいるんだけども。

阿部：読み方もできない、書き方もできない、計算もできないんだけども、誰もまだ店やってない内に俺が先に行けちゃった。早くいけちゃった。

この話を伺ったとき、語り口調こそ悲観的と言うよりも少しおどけたような感じだったものの、阿部さんは私が思っていたよりも、自信のなさや周りへの劣等感を持ち合わせているのではないだろうかと感じた。

『愛よ～愛よ～第2弾』の「手に職」という小見出しの最後にも、「周りには優秀な人たちがたくさんいるのに何でオレみたいなのが、、、」と記されている。

(11) 東京の若者を持ち上げる人への批判

阿部さんは震災当時、ボランティアとして陸前高田を訪れた若者を鶴亀鮎のスタッフと

して、また、お客さんとして多く受け入れていた。この様子は、テレビや各新聞紙でも取り上げられている。インタビュー当日、お店に伺い阿部さんにインタビューを開始するまでの待ち時間で、震災当時に鶴亀鮎に来た若者を取材するテレビ番組の録画 DVD を拝見した。また、前々日の夕飯で鶴亀鮎を訪れた際にいた医学部生 3 人グループに対して阿部さんはとても気さくに接しておられた。そして私は多くの若者をウェルカム！という心意気で受け入れ続けてきていた阿部さんの姿を思い描いた。

時系列が遡ってしまうが、2011 年の 8 月頃、未来商店街での開店に向け皆が動いている時に上野から高田を応援したい！とやって来た若者たちが未来商店街で焼き鳥屋を始めたいと懇願する。この若者たちとプレハブの使用方法などについて未来商店街関係者等が少し揉めたというエピソードがあった。

*：上野から来た人たちも、やっぱりさっき言った（現在阿部さんが持つ）「みんないいよの精神」で受け入れるっていうスタンスだったんですか？

阿部：俺はあんまり好きじゃないんだ。

*：そうじゃない？

阿部：うん。

正直少し驚いた。阿部さんが陸前高田の地に誰かを受け入れる際に否定的な感情を持つはずがない、と私は思い描いていたのですこし意外な感じがした。

阿部：今は若い人たちいっぱい来てるでしょ？

*：はい

阿部：あれはもうすごくありがたい話で、今はようやくそれこそ打ち解けてきたんだけど、最初のうちは（中略）いろんな人から話を聞くとこういう風な話になる。

（・・・）あのお・東京から移住してきた人たちはすごく一生懸命なんだと。（・・・）ね（・・・）当然一生懸命なわけ。

ところが田舎の若いもんはさっぱりやる気がないと。

（・・・）どうもそういうふうに見えるんだよね。（・・・）ところが俺が思うには後から思うには、よそから来た人たちっていうのはまあ高田で、一生懸命に応援しようって。運営しようっていう気持ちで来てやって。ところが田舎で一生懸命やろうと思ってても長男だったりね、店から離れられない。

（中略）

阿部：もしもちょっとしたことをやって失敗もできないので、あんまりみんなみんな思いっきりできない。都会から来た人はそこまっすぐだから一生懸命当然やるし。それを見る人たちは新聞社も何もみんな東京から来た人たちが一生懸命、こも人たちは大して元気がないというような見方をしてる人が多い。

震災当時、陸前高田の若者が外から来た若者と比べてやる気がないと思われることに対して嫌悪感を持っていた阿部さん。私はこの話を聞いたとき、お客さんに対してもオープンな阿部さんがある時期は外から来る人を歓迎していなかったという衝撃が大きく、それ故にこのエピソードを「阿部さんは昔若者を快く受け入れていなかった」と単にネガティブなものとして捉えていた。しかし、考え直してみると、このエピソードは陸前高田の若者が彼らなりの理由故に東京の若者と同じようにまっすぐ何かに取り組むことができないことに対してモヤモヤする阿部さんの心情をよく表していたように思えてきた。また、このエピソードは裏を返せば阿部さんが陸前高田の若者の事情をととてもよく理解しており、

彼らのことをとても大切に思っていることの表れなのではないかと考えた。

*：今は、でもちょっとずつ？

阿部：（・・・）高田のために今やってきてくれてるので、すごく元気ももらってるから、すごくいい話だなんて今は思ってる。

*：その考えが変わってきたのは、きっかけがあったっていうより、やっぱり時間が経ってじゃないけど

阿部：（間髪入れず）そーうだろうね、そーうだろうね。

震災から時間が経ち、今では外から応援に来てくれる人にも感謝しているという阿部さん。『愛よ～愛よ～第2弾』の「辛い言葉（歌）」の中にも「色々元気づけるために、たくさんの方が来てくれて、すごくありがたい話です」と感謝の言葉がある。インタビュー中も、震災から時間が経った現在も尚陸前高田を訪れる人に対する感謝を口にされることは多かった。

ただ、『愛よ～愛よ～第2弾』には当時阿部さんが抱えていた、高田の若者の事情を考慮せず東京から来た若者を持ち上げる人たちへの批判や心境は記されていない。

▶今

2018年8月24日、阿部さんは現在もお店を構える陸前高田市の中心地に鶴亀鮨の本設店舗をオープンした。被災を経験し、避難所での生活や「山の方」でのお店運営など7年間の紆余曲折を経てついにオープンした本設店舗。7年経った現在も、鶴亀鮨は元気に営業中である。しかし、阿部さんには現在の陸前高田市に対する「不満」とそれでもお店を続けていくためにもがき続けている一面もある。

(12) 国と役場への批判

インタビューの後半、阿部さんからこんな言葉が飛び出した。

阿部：商売は、あの一、人をいっぱい集めるために、こう、作ったのに、人がかえって、出て行ってしまって、商売をやろうと思っても、なかなか商売が思うように（・・・）辞めた店何件もあるから。

だから、（市や政府はまちづくりが）成功だ成功だって言ってるけど、作った人たちは成功さ。作った人は成功して、そしてお金もらって帰った人たちも成功で。

（その土地で商売をやる事業者側は）こんなのやってやったんだから成功して当たり前で、失敗したらやり方が悪いんだって言われて終わり。

聞くと、お正月やお盆など県外からの帰省者が増える時期には来客も増える鶴亀鮨だが、普段はお店の周りを訪れる人の数がとても少ないという。鶴亀鮨が店舗を構える盛り土の辺りは行政によって区画整備されたわけだが、阿部さんいわく、地元の人はずっと山側に住んでおり、外食するために普段から中心部へ降りてくるということはないという。また、県外から人が来たとしても店の前には駐車するスペースも設計されておらず、都会と田舎の事情の違いを上手く反映できていないという。

阿部さんはインタビューの後半で、かなり長い時間におよんで市や政府のまちづくりに対して批判を行っていた。インタビューの前半は震災直後の話をたくさん聞かせてくださったが、後半からのお話では震災から時間が経った今も、集客の難しさという別の点で課題を抱えている阿部さんの苦悩を垣間見た。

このことは『愛よ～愛よ～』に記載されていない。

(13) 愛のナイアガラ・大谷・ダニエル

鶴亀鮨にはいくつかの名物がある。その最たるものが、次から次へと繰り出される阿部さんの漫談と、「愛のナイアガラ」と命名された、紙テープを使用したパフォーマンスだ。

*：愛のナイアガラいつから始めたんですか？

阿部：愛のナイアガラ自体はね、あの、震災前からの、そういうことをやってたので、震災の時に何かしなきゃ、何かしなきゃっていうんで、震災後からこうやっていったら、こういう風に。

*：震災後何かしなきゃっていうのは？

阿部：やっぱりね。うん、お客さんを楽しませて、まだまだ大変なんだよということで、あの、何回も来てもらいたいという気持ちを、今もそれ続けてんだけどね。

*：大変なんだよっていうのは？

阿部：被災地はまだまだ大変なので、何回でも寄ってくださいって。

阿部：（中略）だからもう来た人来た人に何度でも、被災地、あの、明るい被災地被災者でごめんねって言ってんだけど笑

*：元気になってもらいたいというよりは、被災地に何回も来てねって伝えたくて？

阿部：そうそうそうそうそう。

阿部さんがパフォーマンスや漫談を行うのは単にサービス精神旺盛な店主だからではなく、「被災地を訪れて現状を知ってほしい」「人足の途絶えた地域に活気を取り戻したい」という切実な願いがあった。おもしろおかしい話や愛のナイアガラの他にも、お店の前に大きな水車を設置したり、チェキのプレゼントなど阿部さんはたくさんの工夫を行ってお客さんに再び店を訪れてもらうにはどうしたらいいか、どうすれば被災地がまだ苦しいという現状を知ってもらうか試行錯誤し続けているのだ。

『愛よ～愛よ～』の本文や巻末に掲載されている新聞記事などには、阿部さんが「お客さんにもう一度被災地を訪れてほしい」という思いからこれらの工夫を凝らしているという話は記載されていない。

▶まとめ

避難所の炊き出し担当を終了する時に、一緒に炊き出し係を行ったみんなに愛のナイアガラを披露したという阿部さん。この時、阿部さんが愛のナイアガラを披露したのは、自身の新しい門出を応援してくれた周りの人たちへの感謝からだという。

阿部：みんなも頑張るよっていうことで、こう、紙テープですかね。

阿部：みんなにこう、あの、よくしてもらってね。その時にみーんなに言われた。あの、『鶴亀さんたちのおかげでみんな助かった』と。うん。だから会うたんび会うたんびみんなに言われてね。一生懸命やって良かったなという思いでね。うん。

避難所では辛い出来事もあった阿部さんだが、周りの人への感謝の気持ちを常に持ち合わせていた様子がとても伝わってきた。

『愛よ～愛よ～第2弾』の巻末には、「鶴亀鮎応援メンバー」と題して新店舗再開に協力してくれた人たちの名前が掲載されている。また、『愛よ～愛よ～第1弾』『愛よ～愛よ～第2弾』両方の裏表紙には「感謝状」が印刷されており、陸前高田を気にかけてくれる人たちへの感謝が述べられている。

また、インタビュー中やお店での会話の中で、阿部さんは何度か「これは自分一人の力ではない」ということを強調していたように思う。

阿部：俺だけがこんなこと書いてやっくと、こんな話してると、俺が一人でやった様に聞く人がいっぱいいるんだっけか。

ちがうよ、と。

こういうことがあったということと、あと冊子に書いてるけど、みんなでやったんだということで、みんな書かないから俺だけ書いてるけど（笑）

この言葉に触れたとき、私は阿部さんの真意に触れた気がした。どんなに困難な状況にあっても阿部さんは周囲への感謝を忘れない。その想いは自分自身にとどまらず、鶴亀鮎へ、関わってくれた人々へ、そして陸前高田という街全体へと温かく広がっているのだと感じた。

5. 分析と考察

ここでは今回実施した阿部さんへのインタビューの記録と、冊子『愛よ～愛よ～第1弾』、『愛よ～愛よ～第2弾』の3つの資料をもとに、各エピソードにおける語りの内容を比較・分析した結果見えてきた以下の5つのポイントについて考察を行う。

（1）当時の自分を表す言葉を見つけられたことについて

今回のインタビューで象徴的だったのは、複数のエピソードにおいて語られた「前向きに生きなきゃ」という言葉だった。この表現は、『愛よ～愛よ～』には登場しておらず、今回のインタビューで初めて聞くことができた。仮にこの言葉が『愛よ～愛よ～第2弾』発行以降（2019年以降）に用いられ始めたものだとすれば、阿部さんは発災から長い年月を経て、ようやく当時の自身を象徴する言葉を見出したあるいは言語化したことになる。過去の語りである『愛よ～愛よ～』には存在しなかった「前向きに生きなきゃ」という言葉が時を経て表出してきた事実は、阿部さんが長年にわたり自身の経験を繰り返し回顧し、内省を深めてきた証拠であり、その結果として捉えることができるのではないだろうか。

（2）阿部さんの人生における「成功」の変遷

阿部さんへのインタビューの中で「成功」あるいはその対義語の「失敗」という言葉が何度か登場した。印象的だったこの言葉をキーワードとして考察すると、阿部さんの人生における「成功」の意味合いの変化の様子を捉えることができた。

『愛よ～愛よ～第2弾』「『成功』とは何か？」では大阪から来た大阪大学医学部生が阿部さんと成功とは何かについて語ったエピソードが登場する。その中で阿部さんは「なるほど、俺の言っていた『成功』は借金のことばかりだった。」と振り返っている。しかし、その後阪大生から成功とは何かをもう一度熟考した軌跡の記されたメールを受け取った阿部さんは、「なるほど、俺の言っていた『成功』は借金のことばかりだった。お金も大事だが、店を続けること、一日一暖簾を出し続けていくことが大事なんだと気付かされま

した。」と書いている。そして今回の語りでは、行政の行ったまちづくり、つまり人が来ていない陸前高田を「失敗」と捉え、お店に、そして陸前高田に人が訪れることを「成功」ととらえているような語りがあった。

すなわち、阿部さんの中の「成功」の意味は、震災前の「負債の解消」から、震災直後の「営業の継続」、そして現在の「店と地域の活性化」へと、その対象を広げながら変遷してきたといえる。

(3) 被災経験を語る際の語りの調整について

また、阿部さんの語りの変遷を分析すると、周囲の被災者と自身の被災経験を比較して語る内容を調整してきた形跡が見て取れる。

2012年の『愛よ～愛よ～第1弾』および2019年の『愛よ～愛よ～第2弾』では自身の心情描写がほぼ排除され、事実に基づいた記述を中心に行われている。一方で、今回のインタビューの中では当時の出来事に伴うポジティブ・ネガティブ様々な心情をご自身の言葉で率直に語ってくださった。

インタビュー前夜に夕飯を食べに鶴亀鮨を訪れた際も、インタビュー中も阿部さんは「俺は家族亡くしてないから」「俺より辛い人いっぱいだから」という言葉を繰り返して口にしていった。発災直後から陸前高田の現状をお客さんや外部に発信してきた阿部さんにとって、「自分より困難な状況にある人々を差し置いて自分が弱音を吐いてはいけない」という自制心が無意識に働いていたと推察される。今回のインタビューで見られた変化は、その心理的な調整に何らかの変容が生じた結果と言えるだろう。

また、この語りの調整は阿部さんに限った話ではなく、被災した多くの人に当てはまるのではないだろうか。

(4) なぜ今、負の感情を語ってくださったのか

今回のインタビューで着目すべきは、これまでの冊子『愛よ～愛よ～』では触れられなかった「負の感情」が吐露された点である。具体的には、自らの心が折れた経験（おにぎりカビ事件）や、未来商店街始動に際する地元住民への批判的な言及（阿部さんの鶴の一声）、東京の若者だけが持ち上げられることに関するもどかしさ（東京の若者を持ち上げる人への批判）などが挙げられる。こうした語りは、阿部さんの中にあつた「語りの調整」の力がある種の変化を迎えた結果だと推察される。かつては「周りの被災者に遠慮して、自らの辛い経験や本音は話さない」という自制心に縛られていたと考えられるが、今回のインタビューではその拘束力が緩み、より等身大で率直な当時の感情が表出していると言えるだろう。

今回のインタビューで語りの調整の拘束力が緩んだ理由を考えた際に正確な答えは分からなかったものの、次の2つほど仮説を立てるに至った。

第一の考察として、3つの資料における「位置づけ」の変遷が語りの内容に変化をもたらしたという仮説を立てる。まず、2012年発行の『愛よ～愛よ～第1弾』は、発災からわずか1年という時期に制作されている。この資料の主眼は、震災の凄まじい被害と被災者の困難を社会に広く伝えることにあつたと考えられる。そのため記述は事実ベースのものが中心となり、かつ周囲への遠慮を伴う「語りの調整」も強く機能した結果、個人的な感情の表出が抑制されていた。次に、2019年発行の『愛よ～愛よ～第2弾』は、発災から約8年が経過した節目に制作された。この段階では陸前高田の現状報告よりも、店舗再開を支えてくれた人々への「感謝」を伝える役割が大きくなっている。そして必然的に、協力者への敬意を優先したことから自らの弱音や他者への批判といった負の側面は書き込まれなかったと推察される。これらに対し、今回のインタビューにおいて負の感情が語られた要因は、その特殊な設定にあるだろう。聞き手が学生2名という少人数であつたこと、素性の知れている筒井先生の連れてきた学生ということから、より警戒心が解かれたこと、そして震災から14年という歳月が「語りの調整」を緩めたこと。これらの要素が重なり、

公的な冊子では表現し得なかった等身大の本音が引き出されたのではないだろうか。

第二の考察として、近年の陸前高田における来客数の減少が、阿部さんの語りに「負の感情」を伴わせる誘因となったという説である。2017年に行われた取材記事に、次のような記述があった。

「最初の頃はお客さんの前では楽しいことしか話してなかったけど、パタリとお客さんが来なくなって、本当のことも言わなきゃと思うようになって、泣き言も少しは言うようになったんです」³

阿部さんはインタビューの中でも震災直後と比較して陸前高田を訪れる人々が激減した現状を話していた。この記事にある「本当のこと」が負の感情を伴う阿部さん自身の経験談のことを指すのだとすれば、阿部さんの語りの変化は、集客の危機感に対する切実な反応であったと解釈できる。こうした語りも、普段から鶴亀鮎のお客さん達に対して日常的に行われていたのかは定かでない。しかし、客足が遠のく中で「伝えなければならない」という切実な思いが阿部さんの日常的な語りの基準を変化させ、その延長線上で私たちに對しても等身大の本音が吐露されたのではないだろうか。

(5) 初めて語られた負の感情を通して考えたこと

また、前述のような阿部さんの負の感情の語りについて考える中で、いくつかの発見があった。

まず、1つ目は、阿部さんはずっとこれらの負の感情を抱えていた、ということである。2冊の『愛よ～愛よ～』を読んだ時、実習1日目に夜ごはんを食べに伺った時だけでは知ることの出来なかった阿部さんの負の感情を今回のインタビューを通して垣間見ること、阿部さんが震災直後から現在に至るまで、(何ならその前の人生の段階から)その影の部分や常に抱え続けてきたことを物語っている。鶴亀鮎を訪れる人に「明るい被災地被災者でごめんねって言ってんだけど(笑)」と気さくに語ってくださった阿部さんの言葉に注目したい。この言葉には周囲や世間が期待する「復興に立ち向かう力強い店主」という理想像を阿部さん自身が演じ、内に秘めていた負の感情をあえて外部に対して遮断してきたことの証左ではないかと感じた。これまで私たちが目にしてきた阿部さんの明るさは、あくまでも阿部さんの中にある多層的な感情の一側面に過ぎない。「明るい被災者」であり続けようとしていた阿部さんのその振る舞いの背後には、他者に見せることのなかった様々な葛藤が、今も沈殿しているのかもしれない。

そして、2つ目の発見として、阿部さんの中には「未だ語りきれない領域」が存在することである。他のエピソードは阿部さん側から淀みなく語ってくださっていたのに対し、娘さんを忘れていた話のときのみ、私から問うたことで初めて語ってくださった。「来た人にはなんでも語りたい」という阿部さんだが、未だ自分の口からは語りたくない、語ることでできないようなエピソードや思いも多く存在するのではないかと推察する。そして、こうした未だ阿部さん側から語られない思いは、時間が経過するとともに阿部さんが過去の自分を表す言葉を見つけることができたように、時間経過が糸口になって語るができるようになるのかもしれない。また、今回のインタビューや『愛よ～愛よ～』作成のように阿部さんが他者と関り、自己の経験や思いを内省することで初めて表出してくれるものなのかもしれない。

³ 橋本 倫史,2017「テレビ越しに観る『被災地』との距離感 陸前高田のすし屋で見えたもの」PRESIDENT Online (プレジデントオンライン), (2017年12月26日取得、<https://president.jp/articles/-/22372?page=2>)

6. 結論と課題

冒頭に立てた「なぜ震災から15年が経った現在、ご自身の被災にまつわる経験談を多く話して下さったのか」、そして「その裏には阿部さんのどのような思いが隠れているのか」について、今回のインタビュー内容と2冊の『愛よ～愛よ～』を比較して相違を整理することで、「5. 分析と考察」で述べたような5つの観点から考察することができた。

「なぜ今語って下さったのか」については明確な答えを導き出せなかったものの、2つの仮説を立てるに至っている。加えて、3つの資料を用いて阿部さんが感情を語った部分と記載されていない部分、そしてその内容を比較することで、阿部さんの中にあるいくつかの事項についての変遷の様子や、負の感情についての考察を行うことができた。

また、様々な時系列のエピソードが錯綜して話されたインタビューの内容を時系列順に整理し、エピソードごとに整理したことで、鶴亀鮎の店主阿部さんのご経験を、当時の抱いていた感情も踏まえながら文章にまとめた。これにより、阿部さんのこれまでの歩みを一連の物語として再構築した『愛よ～愛よ～第3弾』とも呼べる記録をまとめるに至った。

当初は別の方にインタビューを行う予定だったが、急遽阿部さんにお話を伺うことになり、当初立てていたテーマから大きく転換して報告書を作成することになった。しかし、テーマが変わったことに関しての残念感はまったくなく、むしろ阿部さんのお話をこのような形でまとめる機会を頂けたことが嬉しかった。今回のインタビューと報告書の作成を通じて、私は人の人生や様々な人の人柄そのものに興味があるし、寄り添いたいと思っていることに気が付くことができた。

このレポートのタイトルは『愛よ～愛よ～第3弾』と名付けた。阿部さんの自伝が掲載されている2012年に発行されたと考えられる『愛よ～愛よ～第1弾』、そして2019年に発行された『愛よ～愛よ～第2弾』に引き続き、本報告書が『愛よ～愛よ～第3弾』として、多くの人に阿部さんを、鶴亀鮎を、そして陸前高田のことを伝える役割を担っていると嬉しい。

参考文献

店主 阿部和明，発行年度不明『愛よ～愛よ～頑張ってるねえ～』

味と人情の鶴亀鮎 阿部和明，2019『愛よ～愛よ～第2弾一日でも長く店続げで、のれんを出し続けたい』